

TANIMACHI INSTITUTE

有権者動向報告書

2026年9月号 創刊準備号 誌面見本

全国の委託研究員が、政策への評価を有権者に直接なげかけ、その肉声を記録する月刊調査報告書。

一般社団法人 谷町研究所

※

本PDFは誌面構成をお伝えする見本です。収録された調査記録・研究員・取材相手・数値はすべて架空であり、実在の調査結果ではありません。

発行にあたって

数字は、すでに足りている。内閣支持率は毎週のように更新され、政党支持率は小数点以下まで報じられる。それでも、政策を語る者の手元には、いつも同じ問いが残る——その数字の下で、有権者は実際になんと言っているのか。

谷町研究所は、この問いだけのために設立された調査研究機関である。私たちは世論調査をしない。全国各地に置いた委託研究員が、毎月ひとつの研究課題を携えて、辻に立ち、戸を叩き、集会場の椅子を並べる。政策への賛否を集計するのではなく、政策が生活の言葉に翻訳される瞬間——あるいは翻訳に失敗する瞬間——を、そのまま記録する。

本誌「有権者動向報告書」は、その記録の月次報告である。各研究員には毎月、三つの手法（辻説法・個別訪問・有権者集会）の実施と、現場写真を添えた報告を義務付けている。記録には、政策への喝采だけでなく、無視も、罵声も、沈黙も含まれる。読者に届けたいのは要約ではなく解像度である。

本号は創刊に先立つ準備号として、全国10地域の調査記録を収める。研究課題には、現下の国政論戦で野党側から掲げられる7項目を選んだ。この選定は特定の立場への賛同を意味しない。主張が現場でどう受け止められるかを測ることと、主張に与することは、別の仕事である。私たちは後者をしない。それが、購読料だけで運営されるこの研究所の、読者への約束である。

一般社団法人谷町研究所

今月の研究課題と調査設計

研究課題（2026年9月号）

現下の国政論戦で野党側から掲げられる次の7項目を、有権者に直接なげかけ、その反応を記録する。

- ・立憲主義を堅持し、憲法を護ること
- ・安保法制を違憲とし、その白紙撤回を追求すること
- ・辺野古新基地建設を中止し、基地負担の偏りを是正すること
- ・原発再稼働及び新設を阻止し、脱原発社会の実現を目指すこと
- ・あらゆる差別に反対し、我が国の人権状況を先進各国水準に引き上げる不断の努力を続けること
- ・公文書の公開を徹底し、意思決定過程の透明化を推進すること
- ・野党共闘を基軸に選挙戦を展開し、政権交代を目指すこと

※ 課題の選定は、いずれの項目についても当研究所の賛否を意味しない。

三つの手法

- ・手法 内容 記録の狙い
- ・辻説法 街頭に立ち、項目を口頭で提示して反応を待つ
不特定の通行人の即応。無視・罵声を含む「素の反応」
- ・個別訪問 住宅を戸別に訪ね、玄関先で項目を提示する
街頭や集会では現れない、生活の場での本音
- ・有権者集会 会場を設けて項目を提示し、質疑と発言を記録する
まとまった対話。ただし来場者は関心層に偏るため、その偏り自体も記録対象とする

研究員への義務

- ・三手法すべての実施（実施回数・場所・接触人数を報告に明記）
- ・本文3,000字以上の月次報告
- ・各手法の現場写真の添付
- ・発言の引用は話者の属性（年代・性別・職業等）を付し、氏名は記録しない

本号の調査体制

委託研究員10名。調査は衆議院小選挙区（2022年区割り改定後）を単位とし、研究員1名が1選挙区を担当する。本号の担当区は次の通り。

北海道4区／宮城4区／新潟4区／東京8区／神奈川11区／

愛知11区／大阪2区／広島1区／香川1区／沖縄3区

調査期間は2026年8月上旬から下旬。

集約分析 ― 七つの主張は、どこまで届いたか

全国10地域・研究員10名による今月の記録を、項目別・手法別に集約する。以下は各地の報告に基づく編集部の分析であり、個々の記録の詳細は各地域報告を参照されたい。

項目別の温度

最も「届かなかった」のは、第1項（立憲主義）である。これは反発されたという意味ではない。10地域のほぼすべてで、「憲法を守る」ことへの素朴な好意と、「立憲主義」という語の不通が併存した。東京の研究員が「ルールを守る政治」と言い換えた途端に会話が成立した事例は、この項目の問題が主張の中身ではなく語彙の選択にあることを示唆する。広島では「平和」の語彙が飽和し、若年層の「平和教育疲れ」がこの項目への回路を塞いでいた。

最も温度差が大きかったのは、第3項（辺野古）である。沖縄の記録は、賛否以前に「また聞きにきたのか」という調査疲れそのものを主要な発見として報告した。何度答えても変わらないという経験の蓄積が、問いを立てること自体への不信に転じている。一方、本土9地域の反応は「気の毒だが自分事でない」でほぼ一致する。基地負担の「偏り」を問う項目が、関心の偏りによって受け止められているという入れ子構造は、本号で最も重い発見である。

生活と地続きで語られたのは、第4項（原発）だけである。ただしその語られ方は立地地域と消費地で断層をなす。岩内（北海道）と柏崎（新潟）では雇用・除雪・病院・避難道路という固有名詞で語られ、賛否が同じ家庭の中で割れる。東京では理念の問題として語られ、香川では対岸の話として薄い。新潟の研究員は「反対とも賛成とも言えない」と語る人々の沈黙を最も丁寧に拾ったが、この中間層の厚さは世論調査の二択には決して現れない。

第2項（安保法制）は風化と当事者性に引き裂かれている。大半の地域で「もう決まった話」という応答が支配的である一方、横須賀と広島・宇品——基地の街と、呉基地に家族や生計を送る港の街——では賛否のいずれもが具体的だった。横須賀の記録にある「白紙撤回と言うが、今さらどう戻すのか」という実務的な問いは、賛同者の側から出たものである点に留意されたい。

第5項（差別・人権）は、都市と地方で別の壁に当たった。大阪・生野の記録は、当事者地域の「反対と言ってくれるのはありがたいが、で、何をしてくれるのか」という醒めた問いを伝える。地方の複数地域では「差別はこの辺にはない」という認識の壁が報告された。沖縄では本項目が第3項と接続され、「基地の偏りこそ差別ではないのか」という問い返しを生んだ。

第6項（公文書公開）は、唯一、どの地域でも反発を生まなかった。支持政党を問わず「当然だ」という反応が返る。ただし優先順位を問えばほぼ全員が最下位に置く。反対者のいない主張は、争点にもならない——この項目の扱いは、主張を掲げる側にとって戦略上の課題であろう。

最も冷たい反応を受けたのは、第7項（野党共闘）である。特筆すべきは、批判の主力が支持層の内部にあったことだ。「また数合わせか」（複数地域）、「こっちは誰と誰が組むんや」（大阪）、労組員でさえ動員に疲弊している記録（愛知）。主張の名宛人であるはずの支持層が最も懐疑的であるという構図は、7項目中この項目にのみ見られた。

手法別の知見

辻説法は接触効率が最も低いが、足を止めた者の言葉は最も濃い。罵声・無視の記録を含め、他の手法では得られない「素の反応」を拾った。大阪のように辻説法が対話として成立する土地と、足を止めること自体が例外である土地の差も、それ自体が地域データである。

個別訪問は、都市部でオートロックという物理的な壁に直面した（東京の記録は接触失敗率を定量的に報告している）。一方で地縁の強い地域では「どこの人か」の確認を通過しさえすれば、集会では決して出ない本音が玄関先で語られた（香川）。

有権者集会は、全地域の研究員が来場者の偏り——賛同層・高齢層への傾き——を自覚的に記録した。香川の「政治集会ではなく勉強会と銘打てば人が来る」という発見、愛知の「動員で来た人と自発で来た人の見分け」は、集会という手法の限界と使い道を同時に示している。

編集部から

10本の報告を通読して残るのは、主張の当否ではなく、主張と生活の間の距離の、地域ごとの測定値である。同じ7項目が、岩内では雇用の話になり、生野では尊厳の話になり、名護では疲労の話になる。この距離の分布こそ、数字の世論調査が写せないものであり、本誌が毎月記録し続けるものである。

地域報告 ―― 収録10本より1本を抜粋

創刊準備号には全国10選挙区の調査報告を収録します。ここでは誌面の組み方をお伝えするため、新潟4区の報告を抜粋して掲載します。

新潟4区（長岡市・柏崎市） ――同じ茶の間で割れる話

谷町研究所 委託研究員 R03 関原 実

調査概要

期間は2026年8月の一か月。盆と稲の水管理の合間を縫っての調査になった。正直に書くが、8月のコメ農家に平日昼間の時間はあまりない。だから朝夕に寄せた。

- ・辻説法：計6回。長岡駅大手口前で3回（朝7時台）、柏崎駅前で2回（夕方5時台）、柏崎の海水浴場近くの駐車場入口で1回。1回あたり40分前後。
- ・個別訪問：計9日、延べ214軒。長岡市の旧市街と川西の集落、柏崎市の中心部と刈羽寄りの集落を歩いた。在宅して玄関を開けてくれたのが61軒。話が3分以上続いたのは38軒。
- ・有権者集会：計2回。長岡市内の公民館（8月19日夜、来場17名）と柏崎市内の集会所（8月26日夜、来場11名）。

総接触人数は、足を止めた人・玄関で応対してくれた人・集会来場者を合わせて約130人。チラシだけ受け取って行った人を入れれば200を超えるが、それを「接触」と数えるのは水増しだと思うので入れない。

辻説法の記録

辻説法は、やる前から分かっていたことだが、ほとんどの人は素通りである。長岡駅前の朝は特にそう。7時台の人の流れは速い。6回やって、足を止めて話になったのは合計14人。ただ、その14人の言葉は濃かった。

七項目を読み上げる形式でやった。四つ目の原発の項目を読んだときだけ、通行人の歩く速さが変わる気がした。気のせいかもしれない。だが柏崎駅前では確かに変わった。

「あんた、それ反対って言いに来たのか、賛成って言いに来たのか、どっちだ。どっちでもないなら聞くんけど」（柏崎駅前・60代男性・元プラント配管工）。どちらでもない、皆さんがどう思うかを聞きに来た、と答えたら、この人は20分立ち話に付き合ってくれた。孫の代まで柏崎に住まわせたいかと自分に問うと答えが出ない、と言った。「動けば町に金は落ちる。おれの弟の会社も回る。だけど正月の地震のとき、あの渋滞を見たらう。あれで逃げられるとはおれは思わん」。この「だけど」の前後が、この人の中で毎日入れ替わっているのだと思う。

「憲法とか言われても、こっちは今日の売上だわ」（長岡駅前・50代女性・飲食店経営）。項目1への反応はおおむねこれに尽きる。護る、堅持する、と言葉を重ねるほど、聞く側の顔から表情が消えていく。立憲主義という語は、少なくとも朝の駅前では、一度も通じた手応えがなかった。

罵声も記録しておく。柏崎駅前「よそ者が原発の話するな」と怒鳴られた。一度である。無視は数えきれない。雨の日の長岡駅前では、40分やって足を止めた人はゼロだった。傘の下から目だけこちらに向けた高校生が一人いたが、それを成果とは呼べない。

個別訪問の記録

8月の個別訪問は在宅率との闘いである。昼間は年寄りしかいない。その年寄りも、玄関を開ける前にまず疑う。「宗教か」「何か売りに来たか」と最初に言われた回数を正の字で数えたら23回あった。調査ですと名乗り、身分票を見せ、それでもドア越しのまま終わった家が相当ある。

だが、開いた玄関先の話は集会では絶対に聞けない質のものだった。

「うちはね、息子が発電所の下請けにいて、嫁は再稼働反対なの。家の中でその話はしないことになってる」（柏崎市・70代女性・農業）。玄関先で、声を落として、道路のほうを一度見てからこう言った。この「家の中で割れている」という話は、柏崎・刈羽寄りの集落で形を変えて何度も聞いた。賛成の家と反対の家があるのではない。同じ茶の間の中で割れているのである。だから町の中で原発の話は出ない。出せば、どこかの家の茶の間を割ることになるからだ。

「反対とも賛成とも、おれは言えね。言えなっていうのが答えだと思って帰ってくれ」（刈羽寄りの集落・60代男性・兼業農家、冬は除雪）。この人はわたしと同業である。冬の除雪の元請けがどこから仕事をもらっているか、お互い知っている。だから顔を見合わせて、しばらく黙った。この沈黙は録音できないが、今回の調査でいちばん重い記録だと思っている。

「公文書？
ああ、隠すのはよくねえわな。よくねえけど、それより米価と燃料代のほうが先だわ」（長岡市川西・50代男性・専業農家）。項目6はどこでもこの調子だった。反発はない。誰も「公開するな」とは言わない。ただ順番が最後に回る。

差別の項目では、こういうやりとりがあった。「差別なんて、この辺にはないよ。みんな普通にしてるもの」（長岡市内・60代女性・元教員）。ではお子さんが外国の人と結婚すると言ったら、と重ねて聞いたら、少し間があって「それは……びっくりはするわね」と笑った。ない、のではなく、見ないで済む場所に置いてあるのだと感じた。ただしこれはわたしの解釈で、本人は「ない」と言った。両方書いておく。

有権者集会の記録

先に断っておくが、集会に来る人は最初から話を聞く気のある人である。長岡17名、柏崎11名、合わせて28名の反応を「有権者の反応」として読むのは間違いだ。214軒訪ねて玄関が開いたのが61軒、その比率の外側にいる人たちが来ている。この偏りを前提に読んでほしい。

長岡の集会では項目7、野党共闘のところで空気が一番動いた。動いた、というのは冷えた、という意味である。「共闘、共闘って、あんたら何回目だね。選挙のたんびにくっついて離れたり。こっちはもう覚えちゃいねえよ」（長岡・70代男性・元郵便局員）。会場に小さい笑いが起きた。賛同層の集まりですらこれである。政権交代という言葉に、期待の顔をした人は28人の中に一人もいなかったと思う。疲れた顔と、苦笑いだった。

柏崎の集会は11人と小さかったぶん、話が深くまで行った。「避難道路の除雪、冬に誰がやるか知ってるかね。あんたらの言う『安全』の中に、雪は入ってるのかね」（柏崎・60代女性・宿泊業）。この人の宿は発電所の作業員の長期滞在で保っている。再稼働すれば宿は埋まる。それでもこの人は避難計画の話が一番長くした。賛成の立場の人が一番厳しい安全の質問をする。この捻れは机の上では考えつかない。

辺野古の項目は、柏崎の集会で一人だけ、元自衛官だという男性が「負担の偏りっていうなら、うちらも偏りを背負ってる側だわね」（柏崎・50代男性・元自衛官）と言った。沖縄の話としてではなく、自分の町の話として引き取った唯一の例である。それ以外の場では、項目3は終始遠かった。遠い、というのは反対という意味ではない。自分の暮らしと接続する取っ手が見つからない、という意味である。

七項目への反応

- ・立憲主義・護憲——語彙が届かない。反対されるのではなく、言葉が滑る。「憲法を護る」を生活の言葉に置き換える作業を、話す側がやっていない。宿題は有権者ではなくこちらにある。
- ・安保法制の白紙撤回——「白紙撤回」という言い方に「また元に戻すのか、決まったもんを」という反応が数件。賛否の前に「蒸し返し」への疲労がある。
- ・辺野古——遠い。上記のとおり、元自衛官の一言が唯一の接続だった。
- ・原発——全項目の中で唯一、向こうから言葉が出てくる項目。ただしその言葉は賛成でも反対でもなく、「言えない」「家では話さない」「渋滞を見たらう」である。雇用・下請け・宿泊と、避難道路・冬・地震の記憶が、同じ人の中に同居している。この同居を「態度未定」と集計してしまったら、この調査は嘘になる。
- ・差別——「この辺にはない」の壁。反発ではなく不在の認識。壁は厚いというより、壁があることが見えていない。
- ・公文書公開——反発ゼロ、優先順位も最下位。「よくねえけど、それより」の「それより」の先に米価、燃料、医者、雪が並ぶ。
- ・野党共闘・政権交代——冷笑。賛同層の集会ですら苦笑いが出る。信用の残高が一番減っている項目だと思う。

所感

まず自己申告をする。わたしは冬、除雪オペレーターとして食っている。元請けをたどれば、原発関連の敷地や道路の除雪需要と無縁ではない。柏崎刈羽が動くか止まるかは、わたしの冬の実入りに関わる。そういう人間がこの調査をやっている。項目4の記録を読むとき、この利害を頭に入れて割り引いてほしい。わたし自身、あの刈羽寄りの集落の同業者に「言えねっていうのが答えた」と言われたとき、内心どこかで安心した。自分も言わずに済むからである。それが調査者として正しい心の動きだったとは思わない。だが、そう動いたのは事実なので書く。

今月分かったのは、この地域で七項目は「賛成か反対か」の軸に乗らない、ということだ。乗るのは4だけで、その4も、家の外に出た途端に沈黙に変わる。残りの項目は、反対される前に、生活との接続に失敗している。届かないのは相手の耳のせいではない。こちらの言葉が、米価と燃料代と冬の雪の並びの中に置かれていないからである。

失敗も書く。雨の長岡駅前の40分はゼロだった。個別訪問153軒はドアが開かなかった。集会二回で28人。一か月歩いて、数字にすればこれだけである。徒労と言えど徒労だ。ただ、ドア越しに「宗教か」と言った声の警戒の硬さも、玄関先で道路を見てから声を落とした仕草も、数字にならないだけで記録ではある。来月は稲刈りと重なる。歩ける日はさらに減るが、刈羽寄りの集落にもう一度行く。あの沈黙の続きを聞かないと、この報告は終わらない。

写真（キャプションのみ）

- ・朝7時の長岡駅大手口。のぼりの前を通勤の人が目を合わせずに流れていく。足を止めたのはこの40分で2人だった。（長岡市・2026年8月撮影）
- ・刈羽寄りの集落の一軒。玄関先まで出てくれたが、撮影は「家が分からんようにしてくれ」との条件付き。軒先の風景のみ。（柏崎市・2026年8月撮影）
- ・柏崎の集会所、開始前。並べた椅子30脚のうち埋まったのは11脚。空いた椅子も記録のうちである。（柏崎市・2026年8月撮影）

創刊準備号 収録レポート

- ・北海道4区（岩内町・小樽市） ――泊の対岸で「脱原発」は生活の言葉に翻訳できるか
- ・宮城4区（石巻市・東松島市） ――「書類は残ったのすか」と問われて
- ・新潟4区（長岡市・柏崎市） ――同じ茶の間に割れる話
- ・東京8区（杉並区） ――無関心の壁を数える、あるいは「言い換え」の発見について
- ・神奈川11区（横須賀市） ――「白紙」という言葉が届かない街で
- ・愛知11区（豊田市・みよし市） ――「やらされる選挙」の果てに共闘を問う
- ・大阪2区（大阪市生野区・阿倍野区） ――「反対はわかった。ほんで、何してくれるん」
- ・広島1区（広島市中区・南区） ――「平和」が飽和した街で、憲法の話をする
- ・香川1区（高松市） ――玄関先の三和土に立って
- ・沖縄3区（名護市・沖縄市） ――何度目の質問か、と問い返される土地で

定期購読のご案内

全10選挙区の報告全文（本文各3,000字以上・現場写真つき）と巻頭の集約分析は、定期購読者向けに毎月お届けします。月額11,000円（税込）／48ヶ月一括528,000円（税込）。詳しくは <https://tanimachi.jp/> をご覧ください。

奥付

有権者動向報告書 2026年9月号（創刊準備号・誌面見本）

- ・発行: 一般社団法人谷町研究所
- ・所在地: 〒107-0052 東京都港区赤坂二丁目21番2号 第1村嶋ビル401
- ・発行日: 2026年9月1日（見本用の仮設定）
- ・定期購読: 月額11,000円（税込）／48ヶ月一括528,000円（税込）
- ・<https://tanimachi.jp/>

本冊子の記事・写真の無断複製・転載・再配布を禁じます。

引用の際は出典（一般社団法人谷町研究所「有権者動向報告書」発行年月）を明記してください。

※ 本冊子は誌面デザイン検証のための見本です。収録された調査記録・研究員・取材相手・

数値はすべて架空であり、実在の調査結果ではありません。実在の人物・団体とは関係ありません。